

口頭発表種目の適切な選択についてのお願い

講演企画委員会担当理事

白木 正規

当学会の春・秋季大会の一般講演会では、現在、3種類の発表形式を採用している。すなわち、第1種、第2種の口頭発表とポスター発表である。この形式が導入されてから既に5年が経過し、会員はそれぞれの種類の特色を生かして研究発表を行っていただいているものと思われる。しかしながら、講演申込の実態をみると、口頭発表の第1種（講演5分、質疑2分）と第2種（講演10分、質疑5分）の違いを単なる持ち時間の差としてしか理解していないと思われる会員がおられることも事実である。このため、口頭発表の2種類の導入の趣旨について再度お知らせして、会員の適切な講演種目の選択をお願いしたい。

口頭発表の第2種講演は、「よくまとまった段階にある」研究の発表のために設けられているものである。すなわち、学会誌へ投稿予定の研究や卒業研究など、完結に近い研究の発表・討論を目的としたものである。このため、講演予稿の内容には、「必ず1章を設けて主張の明らかな結論またはまとめがある」ことを申込の要件としている。これに対して、第1種講演は、研究の中間報告、速報的な研究発表を目的としたものであり、講演予稿の内容には特段の要件は求めている。

講演企画委員会ではプログラム編成時に、すべての予稿について目を通し、研究の概略をつかみ、適切なセッションへの振り分けを行っている。このとき、第2種講演については講演の予稿内容をチェックして、先に記した要件を満たしているかどうか判断している。この結果、第2種講演の申込のうち毎回20件前後

を、予稿の要件不備として第1種へ変更してきた。

第2種として適切かどうかの判断は、必ずしも厳密で客観的なものでなく、形式に重点がおかれている。これは、少人数の委員で短時間にプログラム編成を行うため、すべての研究内容の完成度まで判断するのが困難なためである。このため、内容的に未完成な研究や中間報告的な研究でも、結論またはまとめが形式的に記されているれば第2種として受け入れることになってしまっている。第2種講演に申し込まれる会員には、第2種講演の趣旨に沿って研究の完成度の自主判断をして申込んでいただきたい。持ち時間が長いことを利用するために第2種講演に申し込まれることのないようお願いしたい。

なお、これまでの例では留学生など外国人の第2種講演の申込を第1種に変更するケースが多くみられた。これについては、周囲の人が第2種講演の趣旨・要件について留学生などによく説明していただきたい。

現行の発表種目に対して変更の意見も若干あるが、講演企画委員会では今後も現行の方式をしばらく継続することにしている。ただ、スペシャルセッションについては、呼びかけ人の協力を求め、セッション内に限って研究の完成度まで踏み込んで、セッションへの採否、第2種講演より長時間の講演、招待講演などの種目を取り入れることについて検討を行っている。これに関してのみならず、講演企画委員会に対する会員の皆様からの建設的なご意見をお寄せいただきたい。